MUSEO ACADEMIAE
大学博物館等協議会ニューズレター
No.26 June 2024

Contents

1 第 26 回大学博物館等協議会・第 18 回日本博物科学会報告（2023 年）
大学博物館等協議会　会長　西秋良宏

3 香川大学博物館　第 26 回企画展「保井コノ －讃岐が生んだ日本初の女性博士－」の開催
香川大学博物館 副館長 篠原 渉・館長 寺林 優

5 金沢大学資料館における二つの博物館 DX 事業 —IDMN と KUDA—
金沢大学資料館　特任助教　松永篤知

7 『発掘 文京の顔 展』開催
愛媛大学ミュージアム　教授　吉田 広

8 大阪大学中之島センターのリニューアル
大阪大学総合学術博物館　准教授　横田 洋

10 大阪大学中之島芸術センター開館記念展覧会「アートトリップ・ナカノシマ——モダン中之島コレクション・アネックス」
大阪大学中之島芸術センター　伊東信宏・山﨑達哉

第 26 回大学博物館等協議会・第 18 回日本博物科学会報告（2023 年）

大学博物館等協議会　会長　西秋良宏

2023 年 6 月 22 日（木）、23 日（金）の両日、北海道大学総合博物館を会場として第 26 回大学博物館等協議会・第 18 回日本博物科学会が開催された。22 日は実行委員長である坪田敏男北海道大学総合博物館長の開会挨拶に始まり、続いて北海道大学山本文彦副学長にはご祝辞をいただいた。その後共通テーマを議論する協議会シンポジウム、ポスター発表による各館活動紹介、さらには館長会議、理事会、総会などの議事がおこなわれた。翌 23 日のプログラムの中心は日本博物科学会の研究発表であった。終了後には、北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園、北海道大学総合博物館の特別見学会の機会が設けられ、盛会のうちに総大会を終えることができた。

今回の北海道大学大会は 2019 年以来、4 年ぶりの対面開催であった。ふりかえれば、新型コロナ禍は本会の事業にも大きな影響を与えたものである。2020 年の総大会は中止となったし、2021-2022 年は会長校（香川大学）が担当するオンライン開催に代替された。この間、現場開催を予定されていながら断念せざるをえなかった九州大学と琉球大学、さらには、会長校であった京都大学、香川大学の博物館長各位にはたいへん難しい判断、舵取りをいただいたこと、深く感謝申し上げたい。

本協議会・学会が目指す第一は、大学博物館共通課題の議論や相互協力の推進にある。そのうえで、実地開催時に各地の大学博物館を訪問して意見交換することには大きな意義がある。北海道大学での 4 年ぶりの対面開催は、参加者にとってオンラインとは異なる集会の意義を再認識する機会となったことであろう。

さて、今回の協議会シンポジウムのテーマは「大学博物館におけるボランティア活動の現状と課題」であった。広島大学、名古屋大学、東京大学、北海道大学の博物館ボランティア活動が紹介され、意見交換がなされた。大学博物館には一般博物館とは異なるボランティア活動が求められている。この点、各館ともよく考えておられることがわかるシンポジウムであった。高等教育をになう大学らしく学生ボランティアの教育、活動の紹介が講演の中心だったからである。例えば、私の東京大学総合研究博物館インターメディアテクにおいては、教員が学生ボランティアを教育して、学生が、来館する生徒への展示説明、博物館の魅力発信を実践するという方式をとっている。大学教員の本分たる高等教育を堅持したうえで、小中高生にもコミットしうるアプローチの一つだと考えている。

一方、昨今の大学は「社会共創」のキーワードとともに、学外からの支援を受けながらの発展を追求する動きたるや急である。大学博物館での一般ボランティアの活動も、その施策の一つとして注目される。ただし、教員の一般ボランティアのみなさんへの対応は、学生への対応とは違うはずである。シンポジウムでは、この点にかかわる教員の負担増についても議論があった。大学教員は教育研究を本務としており、評価も、それらの成

果が重きを占めていることであろう。一般ボランティアさんとの活動はアウトリーチの一つとして評価されることではあるが、一般博物館ではないのだから、それが大学の研究や学生教育の推進にどう貢献するのかを明示的に示しうる活動の仕組みを作る必要があるのだろうと思った。

二日目、日本博物科学会の研究発表冒頭を飾ったのは、本会唯一の名誉会員、藤田正一北海道大学総合博物館元館長の講演である。藤田名誉会員の顕著な功績は、2006 年に博物科学会が発足するにあたって尽力なさったことである。現在、本協議会開催の意義を高めているのは間違いなく、研究発表をともなう博物科学会である。科学研究費の種目に博物科学関連が加えられたのもその一つの成果だとうかがっている。今般の御講演では、設立提案時の熱い思いを語っていただけた。

研究発表は教育、研究、地域と社会連携、マネジメント、展示のセッションに分かれ、口頭発表が計 12 本、ポスター発表は 6 本あった。それらは自由発表であるから、本協議会会員の関心分布を示すと思う。最も多かったのが、口頭、ポスターあわせて 6 本をしめた「地域と社会連携」である。中には、2023 年に施行された新たな博物館法に応じた活動についての報告が含まれていた。大学博物館には地域の核となるような役割が求められているとの国の期待に応じたものと考えられる。また、他のセッションにおいても、この法改正に触れられた発表が散見された。大学博物館は高等教育をになうものだから、社会教育の振興をはかる博物館法とのかかわりには注意深い考察を要する。今後も、議論を深めていくテーマとなるだろう。

総会などの議事におけるニュースとして特記すべきは、長崎大学熱帯医学研究所熱帯医学ミュージアム、大阪大学中之島芸術センター、慶應義塾ミュージアム・コモンズという新たな三館が会員に加わられたことである。それぞれ、特色豊かな活動を展開しておられる。本協議会に新たな視点を持ち込んでくださるに違いない。

以上、2023 年度北海道大学大会は、いくつもの示唆、刺激をもたらす有意義な集会となった。成功に導かれた北海道大学総合博物館長以下、実行委員会各位のご尽力に深く御礼申し上げる。

来年度の会場校は琉球大学、再来年度は九州大学である。それぞれ 2021 年、2020 年に大会をお引き受けいただく予定であったがコロナ禍で実現しなかった会場予定校である。無事開催され、実りある会合を軌道にのせてくださることを期待する次第である。

総会

ポスター会場

香川大学博物館　第26回企画展「保井コノ －讃岐が生んだ日本初の女性博士－」の開催

香川大学博物館 副館長 篠原 渉・館長 寺林 優

香川大学博物館では、2023（令和5）年度に開館15周年記念として第26回企画展「保井コノ－讃岐が生んだ日本初の女性博士－」を2023年7月21日（金）から11月18日（土）までの会期で、学外機関および学内外研究者の協力、学内組織との協働によって開催した（図1）。日本初の女性博士である保井コノ氏（1880-1971）の生涯と研究に取り組んだ姿勢について標本資料等を通して紹介した。82日間の会期中に1,173名の来館があった。関連イベントとして学内外での講演会、フィールドワーク、体験教室、ミュージアム・スペシャルトーク（高校生限定）、サマースクール（中高校生限定）を計7件実施し、201名が参加した。さらに4件のイベントが実施され114名余りが参加した。同展の開催に至った経緯と概要について報告する。

保井コノ氏は、1880（明治13）年に現在の香川県東かがわ市三本松に生まれ、香川県立尋常師範学校（香川大学教育学部の前身校）で学び、1898（明治31）年に卒業後、女子高等師範学校（現お茶の水女子大学）に進学した。1906（明治39）年に日本の女性として最初の科学論文を「動物学雑誌」に、1911（明治44）年に日本の女性として外国雑誌に学術論文を最初に発表した。1914（大正3）年から1916（大正5）年にアメリカに留学して石炭の成因を研究し、「日本産石炭の植物学的研究」としてまとめ、1927（昭和2）年に東京帝国大学理学部に学位請求し、日本における女性博士第一号になった。

図1．第26回企画展のフライヤー（表面）

保井コノ氏は、香川大学にまつわる有名人の一人として香川大学博物館展示室に簡単なパネル1枚で紹介してあったが、同氏の展示が企画されたことはなかった。他に第69代内閣総理大臣の大平正芳氏（香川大学経済学部の前身校である高松高等商業学校卒）ら3名が紹介されている。保井コノ氏の展示をするべきだという声は、学内外から年に数回寄せられたが、開館15周年記念として、言い換えれば15年間も展示が実現しなかったのは、同氏に係る標本資料や同氏が学んだ香川県立尋常師範学校の資料が当館にも香川大学にも存在しないことによる。今回、展示を企画・実現したのは、次のような時宜を得た理由がある。

第一の理由は、地域活性化･観光活性化である。同展開催前の7月20日（木）には、オープニングセレモニーと関係者・報道機関向け内覧会を開催し、保井コノ氏の出身地の三本松がある香川県東かがわ市の上村一郎市長を来賓として招いた（図2）。NHK 2023年度後期連続テレビ小説「ブギウギ」は、「東京ブギウギ」で知られる歌手・笠置シヅ子氏がモデルであったが、東かがわ市は同氏の生まれ故郷でもある。同じくNHK 2023年度前期連続テレビ小説「らんまん」は、高知県出身の植物学者・牧野富太郎氏の人生をモデルと

図2．オープニングセレモニーのテープカット（左から筧学長、上村東かがわ市長、寺林博物館長）

している。保井コノ氏も植物学者で、四国出身であることから同氏とも関わりが深かった。さらに、1927（昭和 2）年に東京帝国大学理学部で同時に理学博士の学位を取得している。「らんまん」効果で、高知県立牧野植物園や牧野富太郎氏の出生地の高知県佐川町には多くの観光客が訪れることが予想され、地域活性化や観光活性化を図る東かがわ市からも協力が得られることを期待した。

第二の理由は、保井コノ氏の専門分野と研究手法である。同氏は、植物学者であるが石炭の成因を研究しており、植物学（植物分類学）者である篠原と地質学（岩石学）者である寺林が協力し、各々の専門性と関係者とのネットワークを活かせば、展示する標本資料を確保することができると考えたからである。

第三の理由は、保井コノ氏が日本初の女性博士であることである。理工系女子（リケジョ）の育成の重要性が認識され、内閣府、文部科学省、日本経済団体連合会の産学官による支援事業が全国各所で多数開催されている。香川大学では、男女共同参画推進室から、多様性を尊重し、認め受け入れるＤ＆Ｉ（ダイバーシティ＆インクルージョン）を推進すべく、ダイバーシティ推進室が 2022（令和 4）年 4 月に設置された。同室の業務は多岐に渡るが、女性研究者支援は一つの柱であり、JST（国立研究開発法人科学技術振興機構）「女子中高生の理系進路選択支援プログラム」に申請し採択された「ダイバーシティ＆サイエンス理系選択応援プロジェクト」では、保井コノ展の関連行事として、中高校生を対象としたサマースクールが計画に含まれていた。

保井コノ氏の研究ならびに教育に係る標本資料の多くは、お茶の水女子大学歴史資料館に保管されている。「保井コノ資料目録」（三木寿子著，お茶の水女子大学ジェンダー研究センター編集・2004 年 3 月発行）には、保井コノ氏の資料目録に加え、同氏の生涯、年譜、研究、支援した研究者たちについて詳細に記されている。同館からは、写真機、スライドや幻灯機、プレパラートや顕微鏡、解剖用具など、さらにプレパラートを作成した石炭標本や学術論文の原図など 300 点余りを借用して展示した。東京大学総合研究博物館からは、博士論文の証拠標本と考えられるプレパラート 27 枚、国立科学博物館からは、保井コノ

図３．保井コノ氏が研究したプレパラートなど

氏の自宅に保管され国立科学博物館に寄贈された 2,000 枚に及ぶプレパラートのなかから、石炭 66 枚、現生植物 65 枚、同氏が比較のために購入したコールボールのプレパラート 17 枚、さらにオオミツバマツの化石 1 点を借用して展示した（図 3）。

上記の展示品を有機的に結びつけるように、保井コノ氏の博士論文の研究内容（日本産石炭の組織の構造の分析から、その形成要因を考察）についてパネルで解説した。また、メタセコイヤで有名な三木茂氏（香川県三木町出身）が発表したオオミツバマツについて、実は保井コノ氏がすでに発表していたマツの化石がオオミツバマツにあたることを示し、保井コノ氏のマツの化石がタイプ標本に指定されたとする最新の研究（Yamada et al., 2015）や、保井コノ博士が日本人女性として初めて海外の学術雑誌に掲載された論文の内容（サンショウモの配偶子形成過程に関する研究）をパネルで解説した。

保井コノ氏が尋常小学校や高等小学校で学んだ明治前期においては、1872（明治 5）年の「学制」公布後、1879（明治 12）年に「教育令」が設けられ、1881（明治 14）年に「小学校教則綱領」が定められて、小学校の第 4 学年（小学校中等科）から「物理」と「博学」を始めることになった。明治初期の科学教育の中心は物理と化学であったが、動物学・植物学の教科書も少しずつ出るようになった。1886（明治 19）年に「小学校令」が公布され、小学校に「理科」が新設され、高等小学校で初めて「理科」が教えられてることになった。このような日本における理科教育の変遷を一覧できる教科書 17 冊を東かがわ市在住で陸

図４．明治前期の小学校教科書

図５．フィールドワーク「保井コノを生んだ港町三本松を歩く」（三本松尋常小学校があった勝覚寺）

生貝類の研究者でもある多田昭氏から借用して展示した（図 4）。同氏からは、保井コノ氏が発表した学術論文が掲載された「植物學雑誌」6 冊と「Cytologia」2 冊他の資料を借用して展示した。

保井コノ氏の胸像は、同氏の母校である三本松小学校に 1972（昭和 47）年に建立され、同校が 2019（令和元）年に閉校するまで児童を見つめ続けた。現在は跡地に建設されたコミュニティセンターの一角に移設され地域の子どもたちと住民を見守っている。

保井コノ氏の研究者としての生涯においては、女性としての苦難があったと考えられるが、同氏が書き述べたものからは、研究を楽しんだことしか伺い知ることができない。保井コノ展の開催が、自然科学に興味を持ち志向する次世代へのメッセージとなったことを期待する。

金沢大学資料館における二つの博物館 DX 事業 ―IDMN と KUDA―

金沢大学資料館　特任助教　松永篤知

現在、金沢大学資料館では、2023（令和 5）年 4 月 1 日の改正博物館法施行を背景とするデジタルアーカイブ化への要請の高まりを受けて、二つの博物館 DX 事業を積極的に進めているところである。現時点で未公開の部分もあるが、それぞれ以下に紹介したい。

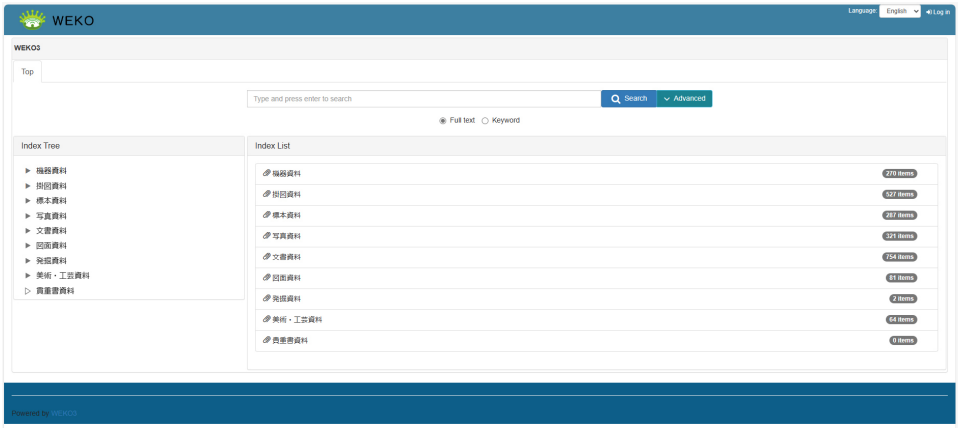
まず紹介するのは、「石川デジタルミュージアムネットワーク（Ishikawa Digital Museum Network）」、略称 IDMN である。これは、文化庁の令和 5 年度 Innovate MUSEUM 事業（ネットワークの形成による広域等課題対応支援事業：事業名「地域博物館のネットワーク形成による石川観光文化資源促進事業」）の助成を受けて構築したネットワークサイト（https://idmn.w3.kanazawa-u.ac.jp/）で、石川県内の地域博物館 6 館（石川県立自然史資料館、石川県西田幾多郎記念哲学館、石川県埋蔵文化財センター、羽咋市歴史民俗資料館、野々市市ふるさと歴史館・野々市デジタル資

IDMN の資料画面（左：パソコン、右：スマートフォン）

料館、金沢大学資料館）の代表的な資料を横断検索・閲覧することを可能にしたものである。公開を開始した2023（令和5）年11月29日時点で、各館30点程度を目安として、500字以内の解説文と1~3点の写真付きで資料を掲載した。デジタルアーカイブネットワークではあるが、あえてアーカイブ機能よりもネットワーク機能を優先した作りになっていることが一つの特徴である。これは、改正博物館法に努力義務として盛り込まれた、他の博物館や地域の多様な主体との連携・協力による文化観光など、地域の活力の向上への寄与にも対応する形にしたためである。すなわち、パソコンでも、スマートフォンでも、気軽に資料を検索・閲覧して、実際に連携館に足を運んでいただき、石川地域の文化観光の振興につながることを企図している。12月17日には、IDMN公開を記念した「博物館DXと地域文化遺産シンポジウム石川2023」をハイブリッド形式で開催し、県内外に広く周知をはかった。その後、2024（令和6）年2月9日にはIDMN英語版・中国語版を公開し、3月9日には一部資料の3Dモデルも追加している（sketchfabに登録した3Dモデルを IDMNに埋め込んで掲載）。令和5年度Innovate MUSEUM事業は終了したが、今後も継続的にコンテンツの充実をはかっていく予定である。

もう一つは、金沢大学デジタル・アーカイブ（Kanazawa University Digital Archive）で、こちらの略称はKUDAである。元々、金沢大学資料館には、2011（平成23）年から公開しているヴァーチャル・ミュージアム（Kanazawa University Virtual Museum）というミュージアムサイト（https://kuvm.kanazawa-u.ac.jp/）があり、KUDAはそのリニューアル版である。より詳しく言えば、ヴァーチャル・ミュージアムは、当館と金沢大学附属図書館・金沢大学医学部記念館の所蔵資料を詳細な資料情報と高精細な画像付き（一部の画像は非公開）で登録・公開したもので、その資料数は約2,000点に及ぶ。Dublin Coreに準じた各資料のメタデータは、かなり充実した内容で、学術研究目的の利用にも応えることができるレベルになっている。そのデータを全て引き継ぎつつ、新資料も大量に追加して、ベースをWEKO3に移行するのがKUDAである。金沢大学の経営改革促進事業として2か年計画（令和5~6年度）で進めているKUDAのプロジェクトは、掲載資料の対象範囲をヴァーチャル・ミュージアムよりも拡大して、逐次公開しながら自校教育や学内外の研究に資することを目指す構想になっている。データの公開や利用の基準等について改めて検討することが多く、2024（令和6）年4月15日時点でまだオープンには至っていないが、サイト構築はかなり進んでおり、できるだけ早くみなさまにご利用いただけるようにしたいと思っている。

以上のとおり、IDMNは石川地域における文化観光の振興を主目的としたもので、KUDAは大学所蔵資料の自校教育および学術研究利用を主目的としたものである。性格の異なるデジタルアーカイブサイトを、学内外の方にそれぞれ積極的に利活用していただくことで、当館の事業が博物館DXの良い事例の一つとなることを願っている。本誌を読まれている大学博物館のみなさまにも、ぜひご利用いただき、ご意見・ご感想をお聞かせいただければ幸いである。



構築中のKUDA画面

『発掘 文京の顔 展』開催

愛媛大学ミュージアム　教授　吉田　広

愛媛大学は2022年8月に、松山市文化・スポーツ振興財団と包括連携に関する協定を締結し、その一貫として、同財団埋蔵文化財センター・松山市考古館と愛媛大学埋蔵文化財調査室そして愛媛大学ミュージアムの三者が、展示や講演会などの具体的連携事業を実施する企画を進めていくこととした。

愛媛大学埋蔵文化財調査室は、愛媛大学構内遺跡の開発事前調査を実施する組織として1987年に発足したが、それ以前の愛媛大学構内の調査は松山市教育委員会が実施してきたため、愛媛大学構内遺跡である文京遺跡発掘調査出土資料は、愛媛大学と松山市に分かれて収蔵保管そして活用されてきた。それを、包括連携事業における合同展示企画として、一括した積極的活用を図ろうというわけである。協定が結ばれた直後、コロナ禍の制限がなお残る2022年度には、愛媛大学埋蔵文化財調査室調査の主要資料を松山市考古館に貸し出し、愛媛大学連携記念特別展『愛大発掘～すごいぞ！文京遺跡～』を開催し、文京遺跡の考古学的評価について、愛媛大学教員と松山市考古館職員による、対談形式の講演会を開催するなどした。

2023年度はこれに引き続く形で、松山市考古館から主要資料を借用して愛媛大学ミュージアムにおいて展示を行い、さらにその展示を松山市考古館に巡回させる方式とした。そのテーマとして選択したのが分銅形土製品であり、特別企画展『発掘 文京の顔 展　まなざしから弥生人の想いに迫る』の開催である。分銅形土製品とは、その平面形状が江戸時代の天秤ばかりの錘である分銅に類することから名付けられた弥生時代の板状土製品で、顔の表現がしばしばあり、弥生時代の土偶とも評される、愛媛松山の弥生時代に特徴的な考古資料である。愛媛大学と松山市に分散保管されていた文京遺跡出土分銅形土製品は34点に及び、実は県内最多出土数を誇る。『発掘 文京の顔展』では、これも含め140点弱に達する松山市内出土の分銅形土製品ほぼすべてを松山市考古館そして愛媛県教育委員会と愛媛県立歴史文化博物館から、若干の県内出土資料も加え借用し、網羅的に集成展示した。

展示では、文京遺跡における分銅形土製品の出土状況を整理するとともに、その直接的ルーツが文京遺跡北側の祝谷周辺の丘陵部の集落に求められることを解説した。さらに縄文時代にまで溯る可能性を示しつつも、分銅形土製品の用途や目的を明確に特定することはせず、立体的な眉と刺突による目と口の、ある意味愛らしい顔の表現に、来館者それぞれが自由に読み取り感じ取るよう促す展示とした。それもあり、展示の最後には、松山市考古館提供の土器復元立体パズルなど体験的

『発掘 文京の顔 展』チラシ

愛媛大学ミュージアムでのギャラリートーク

松山市考古館での展示

あなたの推しは？

ハンズ・オン展示とともに、「あなたの推しは？」と題して、分銅形土製品の顔部分を拡大した写真を用意し、お気に入り投票や感想記入の来館者参加型パネルとした。

愛媛大学ミュージアムでの会期中には、設楽博己氏（東京大学名誉教授）による記念講演会『顔の考古学』を開催し、県内外からの参加者を得た。また、やはり会期と重なった学生祭には、多くの親子連れが大学キャンパスを訪れる中、松山市考古館による勾玉作りなどの古代体験教室をミュージアムの一画で行うことにより、通常とはやや異なる来館者層を多く迎えた。

さらに、愛媛大学ミュージアムでの企画展実施後には、そのまま松山市考古館に展示を巡回させ、松山市考古館では館蔵の関連資料や一部追加借用資料の増補も行うなど、展示の充実が図られた。そして、前年度に続いて、愛媛大学教員と松山市考古館職員による分銅形土製品をめぐる対談形式の講演会も、この事業ならではの方式として、参加者に好評を博した。

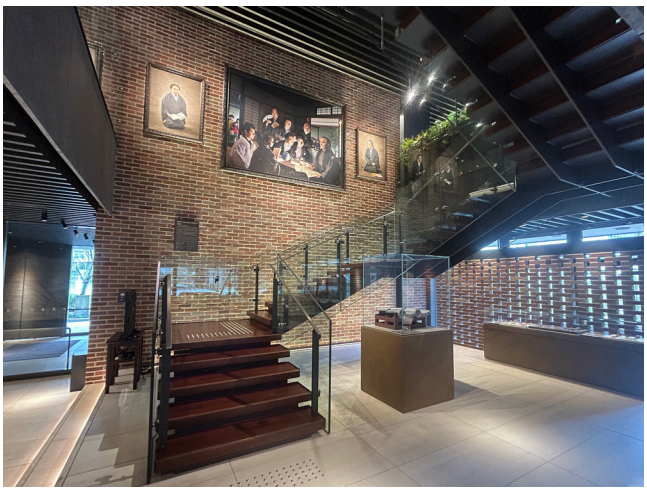
地元自治体との各種連携事業が各大学そして各部局で行われてきているが、展示を通した成果発表、実践的活用の場である大学博物館は、事業成果を目に見える形で発信していく場所に相応しい。しかも、大学と地元自治体の両者が行政手続きを密にしながら実施してきた大学構内遺跡の調査研究は、大学と地元自治体双方にとって、資料と人材を相互補完することにより、稔りある成果を導くことができる可能性が高い。愛媛大学ミュージアムでは、今後もこの連携事業を活用しながら、調査研究の発信に努めていくところである。

大阪大学中之島センターのリニューアル

大阪大学総合学術博物館　准教授　横田 洋

大阪の都心―堂島川と土佐堀川に挟まれた中州である中之島の一帯は政治・経済・文化・芸術など多くの都市機能が集中した街で、近年急速に再開発が進み各方面から注目を集めている。一方で、中之島はかつて大阪大学の医学部と理学部の校舎があった大阪大学創立の地であり、中之島が学問の街であるということも忘れてはならない。大阪大学がその中枢機能を大阪郊外へと移した後、校舎のあった中之島4丁目には大阪市立科学館や国立国際美術館などの施設が開館し、2022年には大阪中之島美術館、2024年には中之島クロスという国際医療拠点が設立され、かつて医学部・理学部の校舎のあった地区は文化・芸術・学術・技術にかかわる最先端の拠点が集積した街となった。

大阪大学も2004年に創立の地の一画に地上10階建ての大阪大学中之島センターを開館し、都心という立地を生かし社会への情報発信などの役割を20年近くにわたって果たしてきた。設備の老朽化なども目立ちはじめた中之島センターは、大学の拠点としての機能強化を進めるために大規模な改修が行われ、2023年4月にリニューアルオープンした。



中之島センター1 階　森村泰昌『適塾の集い』（2023 年）。壁面上部の三幅対の作品。

全学を挙げたリニューアルであったが、そのリニューアルの中核と位置づけられたのが大阪大学中之島芸術センターの発足である。芸術学にかかわる研究・教育を推進するとともに、それらの成果の社会への発信機能を重視した組織・施設である。さまざまな舞台芸術に対応したスタジオや美術作品の展示を想定した展示室も備えられた。総合学術博物館とは別組織であるが、連携して事業を展開している。開館記念展覧会『アートトリップ・ナカノシマ』は 2022 年に総合学術博物館で開催された『モダン中之島コレクション』の成果を下敷きにしたもので、また複数会場で同時開催した特別展『豊中市所蔵　京・大坂　日本絵画の精華』は総合学術博物館と芸術センターの共同で主催、会場の一つとして芸術センター展示室が使用された。

中之島センター2 階　四谷シモン『四谷シモン ルネ・マグリットの男』（1970 年）

中之島センターのリニューアルに際しては芸術センターとの協力とは別に、総合学術博物館として 1 階 2 階部分のリニューアルにも携わった。1 階は中之島センター全体のロビー、2 階はカフェであるが、それぞれ展示空間としても設計されており、総合学術博物館はその展示計画に協力した。1 階部分は適塾記念センターをはじめとする学内の多くの組織との協力関係のもと企画され、大阪大学の源流である江戸時代の学問所の適塾と懐徳堂を中心に大阪大学の歴史を紹介する展示を行った。2 階部分は博物館所蔵の資料や美術作品の展示を行った。

今回の大規模改修によって、1 階と 2 階をつなぐ大きな吹き抜けが設けられ、開放感ある空間へと生まれ変わったが、その吹き抜け部分の壁面には、著名な美術家である森村泰昌の新作『適塾の集い』が展示された。森村は過去の名画に自分自身を重ね合わせる手法で知られているが、本作はレンブラント『ニコラース・テュルプ博士の解剖学講義』を適塾の世界と重ね合わせた作品で、大阪大学の使命とその過去から未来への継承が描かれた新しい中之島センターを象徴する作品となっている。

吹き抜け一階部分には重建懐徳堂の復元模擬屋根を展示している。重建懐徳堂は江戸時代の懐徳堂が明治初めに閉校となった後、大正期に復興し戦前の大阪の学術を支えた学問所である。大講堂のあった木造校舎は大阪大空襲で焼失し、その遺物は遺されていないとされていたが、近年関係者の自宅から焼け落ちた瓦の一部が発見された。中之島センターでは発見された実物に加え、愛知県の栄四郎瓦株式会社によって精密に復元された復元瓦と、復元瓦を用いた模擬屋根を展示している。

2 階部分には、2025 年の大阪・関西万博の開催を見据え、1970 年大阪万博関連の資料や作品の展示を行っている。主要な展示品として挙げられるのは、人形作家の四谷シモンが作成した人形で 1970 年大阪万博せんい館ロビーに展示された作品である。また人形と合わせて 70 年万博の各パビリオンのパンフレット類なども展示している。その他 2 階には大阪を拠点に戦後の抽象彫刻を牽引した今村輝久の作品や大阪大学出身の画家中村貞夫の油彩画、戦前からのコレクションを含む博物館所蔵の鉱石類なども展示している。

中之島芸術センター展示室　特別展『豊中市所蔵　京・大坂日本絵画の精華』（2023 年 10 ～ 11 月）

中之島 4 丁目を含む中之島エリア全体は近年の再開発を経て世界的にみても有数の美術館・博物館が集中したエリアとなったが、中之島に残る唯一の大阪大学の施設として、街に相応しい機能を追求しているのが新しい中之島センターである。その役割の中核を担っているのは芸術センターであるといえるが、総合学術博物館としても今後も中之島センター全体の運営に協力し、文化･芸術･学術の発信拠点としてのさらなる機能強化を進めていきたいと考えている。

大阪大学中之島芸術センター開館記念展覧会「アートトリップ・ナカノシマ――モダン中之島コレクション・アネックス」

大阪大学中之島芸術センター　伊東信宏・山﨑達哉

大阪大学中之島センターの開設

2023 年 4 月、大阪大学発祥の地･中之島に「中之島芸術センター」が誕生した。10 階建ての大阪大学中之島センターを大改修し、その 3 階 4 階を使用している施設で、大阪大学での芸術の研究教育の拠点として運用されている。学部・大学院の授業だけでなく、社会人のためのプログラムなども開講している。また研究と教育に加え、芸術の実践も行える場として、3 階には演劇上演、演奏会、講演会などに使用できる、楽屋・工房を併設したスタジオ、4 階には展示室、作業室、収蔵庫など展覧会のための施設が設置されている。中之島芸術センターは、大学院生・学部生および社会人が芸術の実践に参画し、そのプロセスをともに体験する「共創芸術」の場である。「共創芸術」の場は、大学における高度教養教育及び社会人教育のプラットフォームとしても機能させる。大阪大学中之島芸術センターは、地球規模で複雑化・高度化する社会課題に対応する社会からの要請に応えるために、教育・研究を通じて、知と芸術と世界のあり方を更新してゆくことを目指している。

大阪大学中之島芸術センター開館記念展覧会「アートトリップ・ナカノシマ――モダン中之島コレクション・アネックス」

大阪大学中之島芸術センター4 階展示室では、2023 年 5 月 2 日（火）から、中之島芸術センター開館記念の展覧会「アートトリップ・ナカノシマ――モダン中之島コレクション・アネックス」を開催した。

大阪大学の発祥の地・中之島エリアは、音楽、美術、演劇など様々な芸術が開かれた土地である。また、中之島の地域そのものを題材につくら

1 「アートトリップ・ナカノシマ」展　ポスター

れた作品も多数ある。同時に、美術館や会館等の人が集まる場所も多種多様に存在してきた。現在でも、大阪中之島美術館、国立国際美術館、大阪市立東洋陶磁美術館などの美術館や、大阪市中央公会堂、大阪府立中之島図書館、大阪市立科学館などの文化施設が建っている。2023 年に、大阪大学中之島芸術センターが誕生し、中之島地域の芸術文化施設に新しく仲間入りした。大阪大学中之島芸術センターの開館を記念し、「アートトリップ・ナカノシマ」と題した展覧会を開催し、中之島地域で展開した芸術や、中之島が題材となった作品などを展示し、時空を超えた旅を楽しんでいただけるよう構成した。

本展は、大阪の中之島地域ゆかりのアート作品を展示した展覧会で、2022 年 4 月に大阪大学総合学術博物館で開催した第 16 回特別展「モダン中之島コレクション　“大大阪”時代の文化芸術発信センター」に新資料を加えて再構成した展覧会である。中之島に関連する美術、音楽、演劇などの作品・資料のほか、建築や都市美、観光等に関係する資料を展示しており、中之島地域と芸術の関係性や中之島という地域の特性を考える展示となった。さらに、大阪大学が実践してきたアートプロジェクトや中之島地域を活用した今後のプログラムについても深める内容とした。

会期は、5 月 2 日（火）～7 月 30 日（日）、10 時 30 分～ 17 時 00 分（月曜・祝日休館）。主催は大阪大学中之島芸術センター、共催は大阪大学総合学術博物館、協力は大阪大学大学院人文学研究科、大阪市立住まいのミュージアム（大阪くらしの今昔館）であった。展示構成は第一章（展示室 1）:「中之島と芸術 —— 芸術が花開くアートアイランド」、第二章（展示室 2）:「人の集まる場所・中之島 —— 建築・景観・都市美・観光を意識したアートガーデン」、第三章（展示室 2）:「大阪大学と中之島 —— 大阪大学中之島芸術センターから発信するアートプロジェクト」といったものであった。

令和 5 年度開催の展覧会および令和 6 年度の展覧会予定

なお、令和 5 年（2023 年）度は、展示室において上記以外に次のような展覧会を開催した。中村恭子日本画作品展「風景の肉体」（9 月）、大阪大学総合学術博物館第 18 回特別展 、博物館・豊中市連携事業、中之島芸術センター開館記念「豊中市所蔵　京・大坂 日本絵画の精華 ～花鳥画の名品から俳画の珍品まで～ 」（10 月～ 11 月）、「ヤスキチ・ムラカミの世界展」（12 月～1 月）、企画展「服部良一と笠置シヅ子 : 花開く大阪音曲」（2 月～3 月）。

また、令和 6 年（2024 年）度には、次のような展覧会（仮タイトルを含む）の開催を予定している。糸川燿史写真展「回顧録」（5 月～ 6 月）、天然表現展（6 月～ 7 月）、「今に生きるラスキン」展（9 月～ 10 月）、家を廻る芸能展（11 月～ 12 月）、放浪する人形展（2 月～ 3 月）。

大阪大学中之島芸術センターは、芸術を中心とした研究、教育、実践の場として、今後も展示室やスタジオを活用して、芸術プログラムや芸術イベントを実施し、広く社会へ展開していく予定である。

2 「アートトリップ・ナカノシマ」展　第 1 章 展示風景

3 「アートトリップ・ナカノシマ」展　展示室 2 の様子

大学博物館等協議会加盟館の活動状況

北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園

企画展「北海道主要樹木図譜　原画展」
2024 年 7 月 30 日（火）～ 8 月 25 日（日）
宮部金吾記念館

慶應義塾ミュージアム・コモンズ

「三原聡一郎　レシピ：空気の芸術」展
2024 年 6 月 3 日（月）～ 8 月 3 日（土）
三田キャンパス東別館　3 階展示室他

「Land-Scape ―西洋の書物とお持ち帰りできる風景〈仮〉」展
2024 年 10 月 7 日（月）～ 12 月 6 日（金）　予定
三田キャンパス東別館　3 階展示室他

KeMCo 新春展 2025「へびの憩う空き地〈仮〉」
2025 年 1 月 9 日（木）～ 2 月 7 日（金）　予定
三田キャンパス東別館　3 階展示室他

国立歴史民俗博物館

第 4 展示室特集展示「幕末の外交官 －幕臣柴田剛中とその資料－」
2024 年 4 月 23 日（火）～ 7 月 28 日（日）
第 4 展示室　特集展示室

第 3 展示室特集展示「スクワイア家の記憶 －ある英国人技術者の遺品から－」
2024 年 7 月 23 日（火）～ 10 月 6 日（日）
第 3 展示室　特集展示室

企画展示「歴史の未来 －過去を伝えるひと･もの･データー」
2024 年 10 月 8 日（火）～ 12 月 8 日（日）
企画展示室 A・B

第 3 展示室特集展示「歴史・文化の中の鄭成功」
2024 年 11 月 26 日（火）～ 2025 年 1 月 26 日（日）
第 3 展示室　特集展示室

第 3 展示室特集展示「和宮の雛飾り」
2025 年 2 月 18 日（火）～ 3 月 30 日（日）
第 3 展示室　特集展示室

企画展示「時代を映す錦絵 －浮世絵師が描いた幕末･明治－」
2025 年 3 月 25 日（火）～ 5 月 6 日（火・休）
企画展示室 A・B

京都大学総合博物館

企画展「宇宙からの手紙　隕石の発見からはやぶさ 2 の探査まで」
2024 年 7 月 24 日（水）～ 11 月 3 日（日）
京都大学総合博物館 2 階 企画展示室

愛媛大学ミュージアム

常設展「久米淺井家旧蔵書画展」
2024 年 3 月 25 日（月）～ 4 月 27 日（土）
第 2 常設展示室

常設展「碧梧桐の書展」
2024 年 4 月 30 日（火）～ 8 月 3 日（土）
第 2 常設展示室

「石の魅力大発見 !～ 見て・触って・知ってみよう ～」
2024 年 5 月 7 日（火）～ 6 月 1 日（土）
多目的ルーム、テラス

常設展「日本の巡礼と世界の巡礼」
2024 年 8 月 5 日（月）～ 2025 年 1 月 11 日（土）
第 2 常設展示室

「昆虫展 2024」
2024 年 8 月 8 日（木）～ 8 月 12 日（月）
企画展示室 ほか

愛媛大学・松山市文化・スポーツ振興財団連携事業
特別企画展「学校の戸棚の考古学展」
2024 年 10 月 7 日（月）～ 11 月 30 日（土）
企画展示室、多目的ルーム

常設展「菊川國夫旧蔵コレクション展 2　拓本の世界展」
2025 年 1 月 14 日（火）～ 3 月 29 日（土）
第 2 常設展示室
※タイトルは変更の可能性があります。

東京大学総合研究博物館

特別展示「骨が語る人の「生と死」 日本列島一万年の記録より」
2023 年 9 月 30 日（土）～ 2024 年 5 月 16 日（木）
本館　特別展示室

特別展示『都市 － アーケオロジー』
2024 年 5 月 31 日（金）～ 9 月予定
本館　特別展示室

特別展示「異形の美学 －菱川法之博士 チョウ & アンモナイトコレクション－」
2024 年 10 月予定
本館　特別展示室

特別公開『神々の食物との出会い』
2024 年 4 月 17 日（水）～
インターメディアテク　COLONNADE 2

特別展示『都市 － ヱドキリエズ』
2024 年 3 月 6 日（水）～ 6 月 2 日（日）
インターメディアテク　GREY CUBE

特別公開『モース日本陶器抄 － 東京大学コレクションから』
2023 年 11 月 21 日（火）～
インターメディアテク　MODULE

MUSEO ACADEMIAE 第 26 号
大学博物館等協議会ニューズレター

発行日　2024 年 6 月 27 日
発行者　大学博物館等協議会
編　集　東京大学総合研究博物館　03-5841-2802
〒 113-0033　東京都文京区本郷 7-3-1